



第4回北関東地区庭球大会開催にさいして

山梨庭球協会理事長

崎 田 英 郎

北関東地区庭球大会も今秋で第4回を迎えることになり、私どもの協会が主管することになりました。不慣れな私どもですが、ない知恵を寄せ集めて何とかここまで漕ぎつけることができました。ふりかえってみますと、歴史も伝統もなく小さな組織の協会としては人の和のみが、唯一の資本であり、尊いものであることを今更ながら痛感しております。願わくば、大会運営も……と。

さて、当協会の設立は、風の強い昭和41年5月14日に、この大会の会場であるテニスコート(A、Bコート)において創立総会をもち、山梨庭球協会として発足しました。当日は、関東庭球協会より藤川博会長、当協会設立産みの親と云える故野沢豊輔氏(山梨県出身)、さらに朝日テニス教室を記念行事として催すこともあって鶴原謙造氏ほか渡辺康二、小西一三、柳恵志郎、半田哲也の各デ杯選手一同が来賓として列席され、それぞれ祝辞と激励のことばを寄せていただき、幸先き良いスタートを切ったわけです。さかのぼること約10年、昭和36年には三和電線工業(株)甲府工場内に時の工場長山田茂男氏(現在は同社常務取締役、初代協会長)の熱心な指導によって同好会が発足し、それを中心にして日本銀行甲府支店や僅かの高校教員、国立甲府病院医師等が集う甲友テニスクラブが発足したのは、昭和38年の8月でした。暑い1日、コートで充分汗を流し、夕刻には自己紹介を兼ねて懇親会をもち、数知れずビールを酌みかわしたときのことはいまだに語り草になるほど良い思い出となっております。テニスコートを借り歩き、運営面でも山田氏に大変お世話になった時代に、久保圭之助、故野沢豊輔両氏の適切なアドバイスと度重なる来甲によるご指導を受け、甲友ク・山梨大高体連庭球部の三本柱をもって山梨庭球協会が産ぶ声をあげたわけです。その後、昭和42年には若手独身グループが甲府テニスクラブとして加盟したのを機会に、甲友クも甲府ローンテニスクラブと改称し、小規模ながらも各種の県内大会が実現するようになりました。

最近になって、県内在住の同好者からクラブ入会の照会が多くなっており、来春には甲府地方貯金局がクラブとして加盟を希望する等、ようやく人口増加の兆が見えはじめており、関係者の一人として喜んでおります。

しかしながら、現在のところでは悩みの種がまだまだ山積しております。たとえば、軟庭王国の山梨へ庭球を根づけるには、まず高校への普及を先決として努力しているものの、中学生への普及ゼロが因となって思うように浸透しません。これも、国体開催・高校総体開催というきっかけでもないかぎり、重点的強化態勢がとれそうにもないので当分期待うすとあきらめています。また、専用コート皆無という実状も競技力向上への大きなブレーキとなっております。さらに、若手選手(山梨大・高校生)の離県の問題、あるいは協会運営面では事務的処理事項が特定な役員へ集中してしまうことから、公務との板挟みにあつて実質的活動までなかなか手が廻りかねるなど。私どもに、もうひとつ積極性が欠けていることは気づいておりますが、打開するための良いお知恵を拝借できれば幸甚です。

子どもの成長同様に曲折はあるでしょう。しかし、今の私どもの第一の願望は、優秀なテニスマンを擁したいということです。つまり「強くなりたい」のひと言につきます。高校男子だけは、3年連続国体出場が実現したものの、他の種目は弱いがために予選どまり、大都市をもつ都県が強いのは当然ですが、国際級のプレーヤーからなるチームと、毎年ほとんど決まっているメンバーしかいない本県チームの対戦などははじめからわかっていることですが、予選という名のもとにゲームをしているわけです。たしかに、一流プレーヤーに相手をしてもらえるという絶好な機会ですが、国体予選となると割りきれぬものを感じます。これも弱いからだけでしょうか。

本大会へ強い県が出れるというのは当然でしょうが、強い県が出るというのはどんなものでしょう。国体は選手権ではなく、国民総参加の競技会であり、併せて地方スポーツ振興にも重きをおいている趣旨を再認識する必要はないでしょうか。予選会で勝ち抜けば強い県は本大会へ出れるわけです。しかし、トーナメントという一発勝負の予選会であってみれば、一流プレーヤーを擁する都県にしても負けられないという気持ちが先行するのはあたりまえです。それがために、シードによって本大会出場のチケット予約をしてしまうのは、対等に戦うことのできない地方県の振興という趣旨からみるとどんなものでしょう。地区予選会に出場することも国体への参加であるという筋論からいけば、強弱の差別なしで、ノーシードによる予選方式を提唱したいと思います。強い都県同志の当る確率は何パーセントでしょう。国体競技の趣旨を生かしたいものです。でないと、再びジプシー問題がおこらないとも断言できないでしょう。地区予選をやらなければ消化できない現在、そして地区内の強い都県数と予選通過数が大体同じ（高校男子は別）であるという実態、予選地区を新設する可能性がない今、私どもとしては予選方法について納得のいく検討を重ねていかなければならないと考えます。だまっけていても優秀なプレーヤーが集りやすい大都会にくらべ、あの手この手をつかっても寄りついてもらえない現状の中小地方都市、この母体の相違を打開できる名案は果してないものかどうか。

また、高校生の指導強化という面から、国体他競技にもあるように教員の部の新設を考えてみる必要はないでしょうかももっとも、底辺の拡大を図るよりよき方策を願ってやみません。

そのような意味から、小じんまりとまとまったこの大会の意義を非常に大きく感じます。関東庭球協会の惜しまぬご指導に対し感謝する次第です。今後とも変らぬご指導を願ってやみません。

協会発足満4年、ヨチヨチ歩きの子供が、こんなことを云うようになったのかとご笑納いただければ幸甚です。そのうちに、しっかりとした子供に成長したいと思っております。本県出身であり、当協会設立の恩人、そしてこの大会実現にお骨折りいただいた、今は亡き野沢豊輔氏のご冥福を祈りつつペンを置きます。

(昭和45(1970)年10月24日・25日開催「第4回北関東地区庭球大会プログラム」より)

附記

崎 田 先 生 を 偲 ん で

崎田先生と私は昭和28年頃、山梨大学学芸学部の特ニスコートで知り合いました。お父さんが梨大の地学の教授であり、家も近い関係でよく遊びに来ていました。そして三和電線テニスクラブにも参加し楽しんでいました。2人とも高校教員になり軟式庭球の顧問として大会運営をしていました。2人とも高校に硬式テニス部を創りたいと話しておりました。

昭和40年機山工業高校が硬式に変更、インターハイに参加したことから、甲府南高校も硬式に変更して、昭和41年に高体連庭球部が発足しました。

崎田先生は几帳面で何事もきっちりと処理され、またガリ版切りが上手で、テニス協会の書類など素晴らしいものでした。資料「庭 球」表裏に見られるように、文筆にすぐれアイディアマンでありました。

先生は上野原高校の校長として勤務されていましたが、平成元年12月30日に逝去されてしまい、これからのテニス協会の良きリーダーとして期待しておりましたのに、まことに残念でたまりません。心よりご冥福をお祈りいたします。

この度 山梨県テニス協会創立50周年記念誌にその足跡を残すため、収録させていただきました。

平成27年10月16日

山梨県テニス協会 会長 土屋金蔵